

トラック 4-2

ドンバ[バジニ南部の古称]がバジニに加わるよう要求された時代は、地方の植民地化が日常的な時代だった。それぞれの地域が他の地域によって植民地にされかねなかった。そのようなわけで、この話は、ドンバとバジニにとっても起こったようだ。

サリマ・ワンベという男がいた。彼はドンバのスルタンで、ドンバを取らせて、バジニにしてしまうことが目的のように振舞うことを決めた。彼は、このバジニとの合併ということについて討議するために招かれた。しかし、この招きの前に、ムゼー・ワシマレという男がいた。

バジニを何とか統一するのにやる必要のあることを話し合うために人々がやって来ては、帰っていき、決定は翌日の別の集まりに延ばされた。

ある日の朝、集まりに向かいながら人々はこの男(ムゼー・ワシマレ)とすれ違い、声をかけた。「ムゼー、さあ集まりに行こう」。

彼は答えた。

「わかった。わかった。しかし少し待ってください。何か食べるものをそこで準備するから。バジニとドンバの統一について話している間に皆が食べられるように」。

彼は粥を持ってきて、人々は集まりに出かけ、スルタンを招き、ドンバのスルタンであるサリマ・ワンベも集まりに加わった。

サリマ・ワンベは腰を下ろしたので、交渉がどのように進んだかを知ることができた。そこに着く前に彼は、腰を落ち着けて食べなければならないこと、そして交渉が途中であることを知らなかった。彼は出されたものをそのたびに食べた。

集まりの中の一人が言った。

「それにしても、この人は何をしに来たのだろうか？」。

そこに居た(もう)一人が付け加えた。

「我々はそこで食べたから、この辺で、我々をここに集めた件に入ろう」。

そこでスルタンは「サラーム」と言い、人々は会議をするために座った。

彼は会議の理由を説明し始めた。

「サリマ・ワンベ、我々があなたにここに来てもらったのは、我々はあなたにドンバを売ってほしいからだ。或いは、あなたがそれを我々に譲って欲しいからだ。我々はそのようにして欲しいからだ...」。

彼はそこに持ってきたバフタ(布)を取り、それにくるまって黙った。彼は話さず、バフタにくるまり、そこに横たわった。そして彼は起き上がり、所持品を取って身に付け、馬に乗って去っていった。

彼が馬に乗って去った一方、人々は噂をし始めた。

「それにしても、あの御仁はあれで我々に何をわからせようとしたのだろうか？」。

「あれは一体なんだったんだ？」。

年老いた男が、彼がわかったことを彼らに説明した。

「あの人は恐らく、あれでこう言いたかったのだ。《ドンバが、この地、バジニと一緒にいる前には、まず彼の死が必要だ》と」。

サリマ・ワンベはドンバに着いてから、彼の宮殿のテラスに登り、ラッパを鳴らさせた。

そして彼は言った。

「ドンバの民は宮殿に来るように。為すべき知らせがある」。

そして彼は言った。

「遠からず、バジニがここまでやって来るだろう。われらは戦わなければならない。われらの地、ドンバのために戦うのだ」。

その時、ドンバの一人の男が彼に尋ねた。

「どうして、彼らと一緒にいることを承知しないのですか？」

サリマ・ワンベは答えた。

「私のはらわたは、私の最後の日が来るまでは食べさせない。私のはらわたは虫けらには食べさせない。絶壁に近づこう。私の血は蚊どもには飲ませない」。